まえがき

川口裕司
（東京外国語大学教授）

本報告集は，21 世紀 COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の言語学班の通言語音声研究グループの成果集である。言語学班の研究グループには，コーパス言語学と通言語音声研究の 2 つがあり，前者が大規模言語コーパスを用いた構文分析を行うのに対して，後者は複数の言語の音韻構造や韻律構造を分析する。

本報告集は 2 つの異なる部分から成り立っている。前半の「音声概説」では，11 の言語について，その使用地域，規範と方言，文字と発音，音韻体系，アクセントとイントネーション，音声変異などが詳細に解説される。後半はアクセントやイントネーション等の韻律分析に関する論考であり，2003 年度の研究テーマであった「統語構造と韻律特徴に関する通言語的研究」に関して，若手研究者 3 名がロシア語，フランス語，朝鮮語の事例研究を報告している。

音声概説

音声概説はもともと TUFS 言語モジュールを構成する 4 つのモジュールの 1 つである発音モジュールの理論編として執筆された。ところが，その後，様々な紆余曲折を経て，音声概説の原稿はウェブ出版ではなく，このように報告書として出版されるに至った。[1] 本書に収めることのできた 11 言語は，アジアから中東およびヨーロッパを経て日本に戻ってくる道順に従って，インドネシア語，朝鮮語，フィリピノ語，ベトナム語，ラオス語，モンゴル語，アラビア語，スペイン語，フランス語，ポルトガル語，日本語である。今後さらに多くの言語で同様の音声概説が完成することが期待される。

音声概説は，大学等の講義で，言語と音韻の概略を説明する際の資料として利用されることを想定している。また複数の言語を比較しながら解説を行うことができるように，音声概説の全体の構成を統一し，長さも 15～20 ページ程度に収まるように工夫した。とはいえ，たとえばアラビア語，スペイン語，ポルトガル語のように，複数の規範や標準的変種の観察される言語では，必然的にページ数が増えることになった。

---

[1] この経緯については『言語情報学研究報告 1　TUFS 言語モジュール』，川口裕司，芝野耕司，峰岸真琴（編），2004，東京外国語大学大学院地域文化研究科，pp.6-7 を参照。

韻律分析

通言語研究グループの目的は，アジアの諸言語（日本語，中国語，モンゴル語，フィリピノ語，トルコ語）およびヨーロッパの諸言語（ロシア語，スペイン語，ポルトガル語，フランス語）について，統語構造と韻律特徴の関連性を研究することである。通言語研究グループは，当初，研究推進者として森口恒一（静岡大学教授），斎藤純男（東京学芸大学助教授），川口裕司（東京外国語大学教授）の3名，院生協力者として五十嵐陽介（東京外国語大学大学院博士後期課程），中田俊介（同博士後期課程），牧野真也（同博士後期課程）の3名によって構成され，さらに高木和幸（電気通信大学助手）からも貴重な協力と助言を得ることができた。その後，黒澤直俊（東京外国語大学教授），川上茂信（同助教授）が推進メンバーとなり，宇津木昭（筑波大学大学院博士後期課程）も研究協力者に加わった。本研究グループは2003年度に7回の会議を開催している。

通言語音声研究グループ2003年度会議

第1回 (2003年7月15日)	研究体制と研究テーマ概要
第2回 (2003年8月8日)	曖昧文構造分析（日本語，ロシア語，フランス語，トルコ語）
第3回 (2003年9月12日)	音声工房による分析例，曖昧文構造分析と検討
第4回 (2003年10月29日)	報告 フランス語イントネーションと統語構造
第5回 (2003年11月26日)	報告 ロシア語の疑問文イントネーション
第6回 (2004年2月27日)	報告 音節の持続時間から見たポルトガル語のリズム
第7回 (2004年3月16日)	報告 朝鮮語ソウル方言における統語的曖昧文と F0 の下降現象

最後になるが，本報告集の編集には森口恒一，斎藤純男，川口裕司の3名があたり，本文や体裁の編集は博士後期課程の中田俊介と牧野真也が担当した。